

平成25年度東アジアプログラム研究報告

○プログラム名

孔子思想の歴史学的研究

○研究組織

高木智見が個人で行うプログラム研究である。

○研究の概要と結果

孔子は、社会とは人と人とが仁で結ばれた関係を基軸として構成されるべきであると考えたが、その仁を実践して、民の手本となるべき要務を担うのが君子である。本研究は、孔子や『論語』などに対して歴史的な観点から接近し、孔子が唱えた仁を、春秋時代という固有の歴史的な位置に還元して理解することを目的とする。孔子は、その一生を通じて、春秋末という時代が抱えていた歴史的課題の解決を図ろうとしたのであり、その解決の方案こそが孔子の思想である。こうした観点から、孔子の実像に接近することが可能であると考えている。

今年度は、孔子の思想の重点が時間に応じて変化していることに着目して如上の研究を進めるとともに、内藤湖南の逸文を収集して刊行する『内藤湖南全集』補遺作業を行った。その成果として、第一部解題、ならびに作業の史料論的意義を論じた文章を執筆した。

○研究成果の一覧

(3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）

- ・高木智見「『内藤湖南全集補遺』第一部解題」、河合教育文化研究所より2015年度に刊行予定
- ・高木智見「『内藤湖南全集補遺』編集の史料論的意義について」（共著）、同上
- ・高木智見「修己与治人之間」（『反思中的思想世界』劉沢華先生八秩華誕紀念文集、天津人民出版社、2014年10月、pp.185～212、）

○プログラム名

東アジアにおける多様性を維持する情報通信技術利用の機序

○研究組織

成富 敬

○研究の概要と結果

本研究では、標準化と個別化という視点に冗長性という観点を導入し、多様性を維持することのできる情報通信技術の機序を明らかにすることを目的とする。現在、論文として結実した成果はない。今後、情報にエネルギーの視点を織り込んだ考察を続ける。

○研究成果の一覧

- (1) 学会誌等（発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ）
 - (2) 口頭発表（発表者名、テーマ名、学会等名、年月日）
 - (3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）
-

○プログラム名

東アジアにおける日系企業の人事問題

○研究組織

研究代表者：内田恭彦

○研究の概要と結果

日本企業の次世代経営幹部候補者がそれまでのキャリアにおいていかなる経験をし、そこでいかなる学習方法で何を学習したか（学習内容）について調べ、そのことが実際の経営幹部（中核グループ企業役員）への登用にどのような影響を与えているのか、について調べた。

データは2006年に日本企業のある食品メーカー（一部上場企業）の次世代経営幹部候補者23名に行ったインタビューデータの内、現在同社グループの中核企業（持ち株会社及び2つの事業会社）の役員となっている11名について再分析を行った。この際持ち株会社人事部より経営および人事の基本方針なども伺い、これらの情報も加味して分析を行った。

これまでのキャリアと学習の研究においては、Kolb(1984)の経験学習理論を基礎に置き、キャリア経験と学習内容の関係を明らかにするものが主で、詳細な学習方法を考慮した研究は皆無であった。

明らかになったことは1. 役員にはゼネラリストおよびスペシャリスト（複数職能を経験しているか否かにより分類）がおおよそ半々であったこと。2. ゼネラリストは職能間異動の際直接経験学習よりも比較・類推学習を用いて共通性を認識した部分は過去の経験を活用して学習し、差異を認識した場合は欠乏動機により各種学習を行っていた。3. ゼネラリストは職能間異動を通じて会社や会社グループ全体の理解や問題点、人的ネットワーク構築などを行い、会社全体を動かしていく技量を学習していた。4. スペシャリストは長年同一職能にいることから、当該職能の個別環境の長期的時間軸における変化を認識し、職能の変革と同時に関連職能などへの変革を働きかけていた。

以上のことはこれまでの組織の経済学等が主張する合理的な異動範囲に着いての考えや、スペシャリスト・ゼネラリスト論争などの通説と理論を覆す結果であった。

○研究成果の一覧

- (1) 学会誌等（発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ）
・内田恭彦、「日本型雇用システムと企業の競争力」産政研フォーラム104号、平成24年12月、pp.21-27.
- (2) 口頭発表（発表者名、テーマ名、学会等名、年月日）

- ・内田恭彦、「経営者のキャリア・学習方法・学習内容－比較・類推学習に注目して」、組織学会
（九州支部）、平成27年3月29日（予定）
- (3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）